

何時迄たつても明日迄で仲々解決がつかないことを皮肉つている訳だが、日本人はどちらかといえれば成果を得ようとガツガツやる方である。この両者が上手にかみ合されれば一步一步堅実な進歩が期待出来ないとも限らない。

参考文献（省略）

### 3 カナダ生物学研究所便り

北野 裕（北海道区水産研究所）

8月10日入国してから、5ヶ月目を迎えています。このナナイモの生物学研究所には、宇田道隆（東水大）、田中昌一（東大海洋研）、佐藤隆平（東北大）、長崎福三（水産庁、現日米加漁業委事務局）の諸先生が約1年づつ滞在されており、またここからも多くの方が日本を訪ずれ、親日感に満ちています。私が着任してからも8人の日本人が訪所しました。こちらへ来て、一番驚き、また美しく思うことは、研究環境が恵まれていることです。給料は云わずもがな、施設、器具、研究費などの点でも日本とは比較になりません。それら物質的な面だけでなしに、研究と行政、産業との間がうまく連つており、研究者の役割が高く評価されていることは、非常に研究をやり易くしています。我々が日本の漁村を歩いていて漁民から多くの要求がありながら自然科学の立場からは無力感を抱いたり、あるいは機構改革をめぐる審議で学識経験者から日本の水産研究は役に立たないと云われたりする悩みはこちらにはないようです。

サケマス漁業がB. C. で最も歴史が長く、また産額が大きいことと対応して、サケマス部門が研究所で一番大きな陣容を誇っています。資源評価、スキーナ河サケマス、海洋初期生態、孵化実験、生理、行動、病理などのグループがあつて、当面的な漁業管理の基礎を作るとともに、資源予測方法の向上や再生産拡大のための基礎的な諸研究を進めています。スキーナグループが降海稚魚の鼻孔に小さな磁性鉄片を打ち込んで産卵回帰時に回収する実験を1966年から始めましたが、成果が期待されています。また日本やカナダ東岸のサケマス研究者が、孵化事業の効果を重視している反面、カナダ西岸では人工産卵床の築設一本槍でやっています。資源予想が当たったり外れたりすること、またその理論的基礎は日本と違いがありません。日本の2倍半というB. C. にサケマス産卵床が分散していて道路のない所も多く、産卵場調査は水上機に頼らざるを得ません。また沖とり漁業がないため、海洋生活を知るには調査船が唯一の手段です。こういった点日本にない苦勞があるようです。

サケマス漁業を除くと一般に漁業は初期の発展段階にあるようで、研究上でも漁場開発（エビ、メスケなど）、新種の導入（大西洋のロブスターや日本のカキ）、資源管理の第一歩（ニシン）などが大きい比重を占めているようです。私は今ロスケガレイの耳石を見していますが、日本やソ

違が高度にこの資源を利用しているのに反し、カナダでは未利用で、また10数年にわたつて集められている耳石も手がつけられないでいました。増えすぎて困つているアブラツノザメの<sup>4</sup>減少に役立てるために、政府は1ポンド当り11セントの補助<sup>5</sup>を出して漁獲の奨励と市場の開拓に当つています。スケトウダラも未利用資源の一つです。

勿論トロール漁業も今発展の途上にあつて研究者の間では未利用の水産資源の状態をきちんと捉えておこうという意識が強いようです。カナダでは、行政的にも国民感情の上でも自然の動植物を保護しようという意識が強く、その諸対策には見るべきものがあります。日本のトロールの進出や日系移民の漁業者の活躍は警戒心を持つて眺められています。日米加漁業会議に來加した中部大洋漁業社長に対し「彼が來るとカナダの魚がおびえる」と書いた新聞がありました。それだけ日本の漁撈技術が勝れているということでしょう。もし日本の勝れた漁撈技術がカナダの資源や自然を保護し育てようとする意識や技術と結びついたら素晴らしいと思います。同時に、日本の水産研究がその多面的な漁業活動を背景に所有する豊富な蓄積とカナダの恵まれた研究環境が結びついたら・・・と思います。言葉の障壁があるため、日本の研究報告はあまり読まれていませんが、最近オタワ政府の翻訳サービスを通じて翻訳されることが多くなつたようです。それらを道じて評価が高まつているように思います。細胞学や魚病学などの非常に古い報告が良く読まれて驚いたこともあります。